

海が見えたとき

劇作 大西弘記

■登場人物

勇次

幸代

修

■情景

秋ごろ。昼下がり。

目の前は水平線が広がる無人駅のプラットホーム。

ホームには三本足の古びた屋根とベンチ2つがある。

ベンチには勇次と幸代が並んで座っている。

勇次は花柄のワイシャツを着ていて、サングラスをかけて杖を持っている。

幸代も今どきの服装で足元には鞆が二つ置いてある。

さざ波の音が遠くで聞こえる。

勇次 それで？

幸代 初めての孫だから、やっぱりデレデレしちゃうみたいで。

勇次 それで？

幸代 兄から送ってくるラインの写真だと、私が見たことのないような顔して喜んでます。

勇次 それで？

幸代 あ、英語の教材セットを買ってきたらしいんです。

勇次 それで？

幸代 アルファベットの歌を子守歌代わりに歌ってるんです。それは動画で。

勇次 それで？

幸代 兄が言うには、私と兄にしてあげられなかったことをしてあげたいんだろって。でも、アルファベットの歌ですよ？まだいいと思いますせん？

勇次 早い段階で違う言語を学ばせるのは良いかもしれないよ。

幸代 どうしてですか？

勇次 日本は島国だからあれだけど、僕がこうなる前、仕事でマレーシアのペナン島に一月ほど滞在したことがあってさ、そこでインゴという名前のドイツ人とパートナーを組むことになったんだ。彼は僕より10歳ほど年上で、奥さんはマレーシアの人。と言っても、おおよそだけどペナン島は60%が中国人、30%がマレーシア人、10%がインド人。奥さんはチャイニーズ系マレーシア人です。マレーシアはマレー語というのが現地語なんですけど、共通言語は英語なんだよ。けれど、チャイニーズ系マレーシア人は中国語も喋ってた。

幸代 三つの言葉ですか。

勇次 そう。でね、インゴと奥さんの間には3歳になるマルコって男の子がいてさ。

幸代 マルコ、女の子みたいな名前ですね。

勇次 言われてみればそうだな。

幸代 それで？

勇次 インゴは白人、奥さんは東洋人、ふたりのアイデンティティーの良いところを取ったような可愛い少年です。マルコは3歳にして、ドイツ語、英語、中国語、マレー語を使い分ける少年だった。

幸代 3歳で！

勇次 あ、あとロシア語も使っていたか。

幸代 どうしてロシア語を？

勇次 インゴがロシアから帰化したドイツ人なんだよ。

幸代 なんか、複雑ですね。

勇次 地球上の人口が75億人と言われているこの時代で英語を話せると、その半分の人間とコミュニケーションが取れることになるのかな。で、日本人が1億2千万人。

幸代 その数字だとイメージがわかりません。

勇次 ここに70人の人がいて、そのうち1人しか言葉が通じないと考えるって、ね。

幸代 英語を話せると70人のうち半分の人と話せるってことか。なんか、凄いですね。

勇次 凄いやね、話が通じるってことはね。

幸代 はい。

勇次 まあ、同じ言語を使っても話の通じない人もいるけれどね。

幸代 確かに。

勇次 共通言語がないけれど、ジェスチャーで通じる時もあるしね。

幸代 はい。

勇次 つまりさ、目の前にいる人間の思っていることや考えていることを自分が察知しようするかどうかの問題だね。

幸代 ……私、察知していますよ。

勇次 え。

幸代 勇次さんの今の気持ち。

勇次 ……

幸代 大丈夫ですよ。

勇次 ……歳だつてさっちゃんより17歳も上だし。

幸代 そんなの関係ないですよ。

勇次 さっちゃんはね。

幸代 私が決めた事ですから。

勇次 ……迎えにきてくれるの？

幸代 あ、はい。

勇次 お母さん？お兄さん？

幸代 兄が来ます。あ、でも久しぶりにここでゆっくりしたかったから、次の電車の到着時刻を言っています。

勇次 うん（間）どんな人？

幸代 兄ですか？

勇次 うん。

幸代 ん〜。鈍感。

勇次 鈍感。

幸代 はい。良い意味で。

勇次 他は？

幸代 料理が得意ですかね。小さいころ、母が仕事忙しい時はだいたい兄が夕飯を作ってくれました。

勇次 良いお兄さんだ。

幸代 はい、上京してから母の味より、兄の味が恋しい時がありました。

味付けがちよっと濃いだけなんですけどね。

勇次 ……

幸代 心配ですか？

勇次 この歳になって、こういう経験初めてだから。

幸代 ちゃんと行ってありますから。

勇次 どこまで？

幸代 え。

勇次 どこまで言ってるの？

幸代 結婚を考えてる人と行くって。

勇次 他は？

幸代 ……それだけ。

勇次 (少し考えて笑う)

幸代 だって……

勇次 さっちゃんは悪くないよ、なんも悪くない。

幸代 勇次さんだって何も悪くないです。

勇次 やめない？

幸代 え。

勇次 敬語。

幸代 だって……

勇次 僕たち、夫婦になるんではいよ？

幸代 夫婦になっても、今までと同じ距離感でいたいから、その方がずっと新鮮でいられるような気がして。

勇次 言葉のチョイスだけで？

幸代 それだけではないですけどね……

勇次 (少し考えて笑う)

幸代 おかしいですか？

勇次 ううん。

幸代 じゃあなんですか？

勇次 さっきの話に戻るけどさ。

幸代 さっき？

勇次 同じ言語を使っているけど通じない人もいるって話。

幸代 え、私たち通じてないですか？

勇次 そうじゃない、そうじゃなくて。

幸代 はい。

勇次 言葉の意味だけが通じてても、それは意味だけ。さっちゃんのようにさ、結婚する僕に言葉を選んでコミュニケーションを取るのはさ、相手に対しての気持ちも現れるよなって思ってたさ。

幸代 そうですかね。

勇次 僕が何も見えないから？

幸代 え・・・

勇次 僕は、君がどんな顔をしているのか知らない。

幸代 普通です、たぶん。

勇次 普通でもそれ以上でもそれ以下でも僕には見えない。

幸代 はい。

勇次 だからさ、現象面以外のことを普通以上でいようとしてくれていい君の努力なのかなって。もし、そうなら、そんな努力をする必要はないわけさ。だって、君は君だから。

幸代 違います。

勇次 え、何が？

幸代 私、そういう努力をしているんじゃない・・・

勇次 なくて？

幸代 ずっと、この距離感でいたいんです。馴れ馴れしくなりたくないんです。

勇次 古風だね。

幸代 古いんじゃないです、新しいんです。

勇次 (少し考えて笑う)

幸代 (つられて笑う)

勇次 ありがとう。

幸代 え・・・はい。

勇次 うん。

幸代 あ、ここって気持ち良くないですか？

勇次 うん、気持ち良い。

幸代 最近では遠くからわざわざここに来る人もいるみたいで。

勇次 そうなんだ。

幸代 はい。ちょっと有名な海の見える無人駅。なんか映画とかドラマ

とかでも撮影で使われるみたいで。

勇次 どんな風景？

幸代 え？

勇次 (海を見ている)

幸代 海です。

勇次 どんな？

幸代 どんなって・・・私の生まれ育った海。

勇次 うん。

幸代 とっても大好きな海。

勇次 うん。

幸代 静かなときもあれば、恐ろしいときもあって。

勇次 うん。

幸代 でも、今日はとっても静かです。

勇次 それで？

幸代 光ってます。太陽の光を波が乱反射させてキラキラと。

勇次 それで？

幸代 今日はお天気も良いから青島も見えます。

勇次 青島？

幸代 瀬戸内海に浮かぶ島です。猫の島で有名な。

勇次 それで？

幸代 綺麗に水平線も見えます、くっさり。

勇次 それで？

幸代 国道378号線の歩道でお爺さんが犬を連れて散歩してます。

勇次 それで？

幸代 犬が座り込んで歩かなくなってお爺さん、困ってるのかな？

勇次 それで？

幸代 あ、お爺さん、犬を抱っこして、歩き出しました。

勇次 犬もお爺さんなのかな？

幸代 そうかも。国道を越えるとテトラポッドが並んでるんです。ずっと。ずうっと。

勇次 うん。

幸代 小さいころ、寂しい時や哀しい時、いつもひとりでテトラポッドの上に座ってこの海を眺めていました。お父さんが病気で死んじゃった時も。

勇次 そっか。

幸代 はい。

勇次 懐かしい？

幸代 え？

勇次 この海。

幸代 はい。

勇次 いつぶり？

幸代 3年ぶりです。

勇次 変わった、この辺。

幸代 んん、そんなに。

勇次 そっか。

幸代 あ、夕暮れ時は西の方に漁港があるんですけど、その先に沈んでゆくんです、ゆっくらと。

勇次 綺麗なんだろうな。

幸代 え。はい、とっっても。

勇次 とっっても、か・・・

幸代 はい。

勇次 ……

幸代 勇次さん？

勇次 やっぱり帰るよ。

幸代 え。

勇次 帰る。

幸代 どうしてですか？

勇次 ……

幸代 勇次さん？

勇次 見えるんだよ。

幸代 見えるって？

勇次 僕と一緒にいることで苦労するだろうさっちゃんかぞ。

幸代 え？

勇次 お母さんやお兄さんだって。

幸代 反対するってことですか？

勇次 普通そうでしょ、そっだよ。

幸代 そんなのわかんないじゃないですか。

勇次 わかったら僕も君も傷つくだけだよ？

幸代 私は傷ついても構いません。

勇次 ……

幸代 勇次さん。

勇次 ごめん。やっぱり帰る。

幸代 どうやって？

勇次 え？

幸代 どうやって帰るんですか、東京まで。

勇次 ……

幸代 ごめんなさい、そんなつもりじゃ。

勇次 いや、いいんだ。

幸代 すみません。

勇次 でも人に尋ねながら帰るよ。次の電車はいつくるの？

幸代 いつって・・・私、勇次さんのお父さんとお母さんに挨拶したんですよ？

勇次 1時間に一本って言ってたっけ。さっきの電車降りて30分は経

ったよね。

幸代 私、残して帰るんですか？

勇次 だって、さっちゃんは3年ぶりに帰ってきたわけだから。

幸代 それは勇次さんとのことを報告するから・・・お父さんにだって。

勇次 ごめん。

幸代 ……じゃあ、次の電車が来るまで考えてください。

勇次 え？

幸代 私、久しぶりにテトラポッドに行ってきます。勇次さんから私の姿が見えなくても、テトラポッドの上からは、このプラットホームが見えから。次の電車がこの駅に入ってきて去ったあとに、プラットホームに勇次さんいなかったら私も本当に縁がなかったんだなって諦めます。勇次さんの鞆、ここに置いておきますね。さよならは言いません（自分の鞆を持って去る）

沈黙

沖から船の音が聞こえる。

そこに修が登場。

修 （人を探している様子。時計を見る）あれ。

勇次 （気にせずベンチに座っている）

修 （もうひとつのベンチに座る。携帯が鳴り、電話に出る）もしもし、うん、それがいないんだよ。うん、時間間違えたかな、まあ、ちょっと待ってるよ。おお、おお、裕紀人が泣いてるぞ。うん、うん、はい。

勇次 ……

修 （勇次が気になる）

勇次 （微動だにせず座っている）

修 観光ですか？

勇次 え。

修 良いとこでしょ、いい。

勇次 ええ。

修 この駅のこのベンチに座って、じつやって海を眺めてると、電車、

いつまでも待ってられますよね。

勇次 ええ。

修 いつ来られたんですか？

勇次 え？

修 愛媛に。

勇次 今日、です。

修 ああ、そうなんですネ。楽しんでってくださいね。

勇次 楽しむ、ですか・・・

修 あれ、お気に召しませんでした？

勇次 いえいえ、そんなことはないです。

修 そうですか。あ、今日はどちらに宿を？

勇次 それが・・・

修 もしかして、これからお探しですか？

勇次 いや、そういう訳じゃなくて。

修 あ、もうお決まりでしたか。

勇次 帰るんです。

修 え。

勇次 今から。

修 ああ、日帰りですか。

勇次 まあ。

修 仕事で来られたんですか？

勇次 そういうわけではないんですけど。

修 どちらから？

勇次 東京です。

修 東京。飛行機使って5時間くらいですか。

勇次 そのくらいでしたね。

修 そうですか。東京か。

勇次 こちらの方ですか？

修 ええ、生まれも育ちも。

勇次 そうなんですネ。

修 こっから車で5分くらいのとこにペンションがあって、そこをお

袋と経営してるんです。

勇次 そうなんですネ。

修 もし、また来られることがあったら日帰りじゃなく泊りでしたら、是非、うちに。

勇次 はい。

修 あ、なんかすみませんね、別に営業をしに来たわけじゃないんですけど。

勇次 いえいえ。

沈黙

修 迎えにね。

勇次 お客様ですか？

修 いや、妹です。

勇次 あ、そうなんですネ。

修 東京の大学出たは良いんですけど、やっぱり田舎より東京の方が良
いって中々帰ってこないんですよ。

勇次 僕は東京育ちなので、じいじい長閑なところ、心が落ち着きます。

修 ですよ。

勇次 ええ。

修 まったく若いっていうのは罪ですよ。

勇次 (笑う)

修 ですよ。

勇次 そうかもしれませんね。

沈黙

修 12コも歳が離れてるんですよ。

勇次 妹さんと？

修 ええ。で、妹が幼い時に父を病気で亡くしましてね。お袋は僕たち
を育てるために仕事ばかりでしたから、いっつも僕が妹を面倒見て

てね。

勇次 苦勞されたんですね。

修 え。

勇次 お兄さん。

修 いや、それほどでもないですよ。

勇次 妹さん、次の電車ですかね？

修 どうやら、そうみたいです。次は何時だったかな。

勇次 あと15分くらいですかね。

修 実は・・・

勇次 はい。

修 連れがいるらしいんですよ。

勇次 妹さん？

修 ええ。

勇次 お友達ですか？

修 いえ。

勇次 じゃあ、恋人？

修 んんん。

勇次 (笑う)

修 (つられて笑う)

勇次 そりゃあ、妹さんが彼氏連れてきたら、やっぱり複雑な心境ですよね。

修 それが違うんですよ。

勇次 あれ、違うんですね。

沈黙

修 婚約者。

勇次 え・・・(動揺して杖を落とす)

修 あ(拾ってあげて渡そうとする)じいぞう。

勇次 (手探りで杖のある位置を探す)あ、じいぞう。

修 え・・・(勇次が盲田であることに気づく)

勇次 (手を差し出し) すみません、ここにもらえますか？
修 あ、はい。

勇次 ありがとうございます。

修 一人で？

勇次 え。

修 一人で来られたんですか？

勇次 いえ。

修 じゃあ、付き添いの方を待ってるんですか？

勇次 そういう訳でも。

修 一人で東京まで帰られるんですか？

勇次 そういうことになってしまいました。

修 なってしまった・・・？

勇次 ええ、まあ。

修 なんかあったんですか？

勇次 ええ、まあ。

修 んんん、そうですか。

勇次 ええ、まあ。

修 一人で、すか。

勇次 ええ、まあ。

修 あ、なんなら松山空港まで車で送りましょうか？

勇次 いえいえ、それは。

修 いや、大丈夫ですよ、今日は宿泊客も少なく、お袋ひとつで十分

だと思っんで。

勇次 でも。

修 なんですか？

勇次 妹さん、来られるんですよ？

修 ああ、いいんですよ、別に。

勇次 だって迎えに来られたわけだし。

修 歩いたって15分くらいですから大丈夫ですよ。若いんだから歩けて、ね。

勇次 父親代わり、でしょ？

修 んん、まあ、そうですね、妹は昔っから頑固で、こうと決めた
ら真つすぐなんです。だから、どんな男連れてくるのかわかりませ
んが、僕が反対したところでね。

勇次 ……

修 それに、誰と結婚しよう、あいつが幸せなら死んだ親父もね。

勇次 ……

修 って言っても、やっぱり父親の代わりって緊張しますよね。そう思
いません？

勇次 そ、そうですね。

修 でしょ。だから、空港まで車で送りますよ。あ、そうだ、今度こ
らにいらしてくれたら、うちのペンションに泊まってくれば良い
で。ね。

勇次 緊張しますか？

修 え、親父の代わりですか？

勇次 はい。

修 ええ、まあ。

勇次 幸せになってくれれば良いって言っても、やっぱりどんな人を連
れてくるのか気にはなりますよね？

修 ええ、まあ。

勇次 おかしな人、連れてきたら流石に困りますよね？

修 ええ、まあ。

勇次 幸せになってほしいですもんね。

修 ええ、まあ。

勇次 一発殴らせろとか言います？

修 言わない、言わない。今どきないでしょ？

勇次 ですかね。

修 自分、もう結婚してて半年の子供がいるんですけど、嫁の両親に
挨拶行ったとき、凄いい歓迎されましたよ。やっと片付いたって。

勇次 物みたいですね。

修 でしょ。いや、嫁は三姉妹の末っ子で。そういうのもあるんでしょ
うね。でも、うちは、ほら、ね。

勇次 ですね。

修 でも、お袋、アホみたいに楽しみにしてるんですよ。

勇次 お母さんが。

修 ええ、まあ。で、僕は僕で、もし親父が生きてたら、どんな気持ちなんだろうなって、最近、そんなことばかり考えちゃって。僕もアホですね。

勇次 いえ、当然ですよ。

修 おお、理解者（握手を求めるが、見えてないことに気付き、自分で手を握る）あ、おお、理解者。

勇次 いえ、そんな。

修 あの・・・

勇次 はい。

修 聞いてもいいですか？

勇次 何をですか？

修 その、生まれつきですか？

勇次 え、ああ。違います。

修 ご病気で？

勇次 いえ、まあ、事故です。

修 そうですか。

勇次 もう10年も前ですからね、慣れましたよ。

修 慣れるって・・・

勇次 生活も精神も。

修 （話を転じるように）ってか、素敵なシャツ着てっ・・・あ、すみません。

勇次 いえいえ。

修 すみません。

勇次 嬉しいです。これ、選んでくれた人がいて。

修 ああ、ああ。その人、良いセンスしてます。

勇次 ありがとうございます。

修 決めた！俺、絶対に空港まで送りますよ。

勇次 いや、その。

修 遠慮しないでくださいよ。

勇次 いや、そういう訳じゃなくて。

修 僕ね、あなたとお話してて、少し勇気が湧いてきました。

勇次 勇気？

修 ええ。実は怖かったんですよ。

勇次 怖かった？

修 ええ、まあ。

勇次 妹さんの婚約者とお会いするのが、ですか？

修 はい。

勇次 そうですよ。

修 そうですよ、だってね、こんなに小さかったんですよ。まあ、誰でも小さい時は小さいんですけど、今でもね、そりゃ、身体も心も大人の女性になったかもしれないよ？しれないけれど、やっぱり妹は妹でしょね、まあ、僕らの家庭環境が、その、どうしても、うん、その、なんかね、こう、なんか・・・

勇次 お兄さんの気持ち、わかります。

修 え。

勇次 父親のように育ててこられたんですよ。

修 そうなんですよ。自分で、そうだったって言うのが言いにくくてね、恥ずかしくてね、やっぱり兄は兄だから。

勇次 お母さんが仕事で忙しいときは、お兄さんが夕飯作ってあげてたんですよ？

修 そうなんですよ、あいつ、僕が作る料理、なんでも美味しい美味しいって食べてたんですよ。嬉しそうにね。あの時の笑顔がね、ずっと僕のなかであってね、だから、ある面ではあのまんまなんですよ。

勇次 味付けがお母さんより濃いつて。

修 そう、僕の方がちょっとだけ・・・え。

勇次 男の料理。

修 そう、男の料理です。あ、だから、あなたを空港まで送ったあと、まあ、妹たちは歩いて帰らせますけど、僕も帰ったら、ピシッとして親父代行を務めます。

勇次 あ、はい。

修 じゃあ、行きますか。

勇次 いや、あの、その。実は・・・

修 あ、すみません。お名前、聞いていいですか？

勇次 勇次と言います。

修 勇次さん、俺は修です。

勇次 修さん。

修 はい。

勇次 僕も聞いても良いですか？

修 どうぞ。

勇次 例えば妹さんがですよ。

修 はい。

勇次 妹さんの連れてくる男性が東京の人だしたら、どう思いますか？

修 そんなの気にしないですよ、どこで生まれて育った人でも、妹を大事にしてくればね。

勇次 だって、東京に永住するかもしれないですよ。盆と正月くらいしか帰ってこないんですよ？

修 まあ、どこにいても元気なら。

勇次 じゃあ、じゃあですよ？

修 ええ。

勇次 修さんより年上だったとしたら？

修 んん、それも、ありですかね。最近じゃ、女の方が長生きするでしょ？歳が同じでも、どうせ先に男が死ぬんですよ。うちの親父が、

そうでしたからね。

勇次 そうですか。

修 なんで？

勇次 いや、別に。

修 そいじゃ、行きますか、そこに車泊めてあるんで。

勇次 もうひとつだけ。

修 (笑いながら) はい。

勇次 もし、僕のような人だったら？

修 勇次さんのような？

勇次 ええ。

修 (勇次を気にせずに) それは苦勞するでしょうね。

勇次 ……そうですね、すみませんでした。では、お願いします。

修 (勇次を気にせずに) あ、いや、そういうわけじゃ。

勇次 ああ、いいんです、大丈夫です。

修 (勇次を気にせずに) でも、その苦勞が幸せを感じる苦勞なら良いんじゃないですか？

勇次 え。

修 (勇次を気にせずに) 日本人同士なのに話の通じない奴もいるし、人の気持ちもわかってとうとしない奴もいるし、そんな奴んどこいくくらいなら、勇次さんみたいな方でも、ちゃんと妹を大事にしてくれればね。

勇次 ……

修 どうしましたか？

勇次 ……なれると良いですね。

修 え。

勇次 妹さん、幸せに。

修 ありがとうございます。

勇次 ……もう少しだけ、見ていてもいいですか？

修 え。

勇次 この、海です。

修 ああ。え。

勇次 僕の大切な人が、とっても好きだった海。

修 ええ、どうぞ。

漁船が海をゆく音がする。

修 あ、漁師たちも帰ってきましたね。瀬戸内海で取れる魚、美味しいんですよ。良かったら、食べてきますか？

勇次 ……

修 ……

勇次 すみません。

修 え。

勇次 ありがとうございます。

修 いえ。

勇次 じゃあ、空港まで、お願い、しても、良いですか？

修 ええ、いいですよ（勇次の鞆を持ち）荷物、ひとつですか？

勇次 ええ、すみません（立ち上がり）

修 こっちです（誘導してあげる）

勇次 （去る）

修 （去る）

ふたりが駅から去ろうとしたとき、丁度プラットホームにディーゼルエンジンの電車が入ってくる。そして走り出す。誰もいなくなった海に見えるプラットホーム。

段々と日が暮れてくる。

幸代が戻ってくる。

幸代 （ベンチを見て、ゆっくりとベンチに座る。さっきまで勇次が座っていた箇所を優しく哀しく摩る）

瀬戸内海の水平線に真っ赤な太陽が一日の役目を終えて、ゆっくりと沈んでゆく。

幸代 （自分の前から水平線に沈んでゆく太陽を、まるで勇次に見立てるようにして眺めている）

幸代、いつの間にか太陽に心を奪われている。

数日後。明け方。

目の前は水平線が広がる無人駅のプラットホーム。

ボサボサの寝ぐせ頭にドテラを着ている修が登場。手には缶コーヒーを二本持っている。そのままベンチに腰をかけた海を眺め欠伸をする。

少し遅れて幸代が登場。ベンチに座る。

さざ波の音が遠くで聞こえる。

修 ほれ(コーヒーを幸代に投げる)

幸代 (キャッチして) 高校の卒業式の日、ぶりかな。

修 ええ？

幸代 兄ちゃん、ここでこうやって朝日を眺めるの。

修 あの時ぶりか。

幸代 うん。

修 でも、まあ、よくここで夜明けを眺めたもんだ。

幸代 うん。

修 俺は夕暮れ時の方が好きだったんだよ。

幸代 知ってる。

修 そうか。

幸代 お母さん、朝から晩までペンション忙しかったから。

修 お前、小さいころ、よくお母さんの文句ばかり言ってたもんな。

幸代 甘えたかったんだよ。

修 知ってる。でもさ、母さんとペンションやってて思うけれど、結構大変なんだよな、こつこつ商売。おまけに不景気だろっすよ。よく、女手ひとつで俺とお前、育ててくれたよ。偉大だぞ、母さん。

幸代 知ってる。

修 そうか。

幸代 なんか言ってた、母さん。

修 別に。あ、良い人だねとは言ってたかな。

幸代 そう。

修 松山空港に送ってる途中で何で海を見たいって言ったのかなって、ああって思ってたさ、もしかして妹のって聞いたら、すみません、すみませんって。なんかさ、本当に良い人だなんて。

幸代 うん。とっっても。

修 まあ、大変だろうけどな。

幸代 知ってる。

修 これから知る大変さだってあるぞ。

幸代 知ってる。

修 そうか。

幸代 うん。

修 今日帰るのか？

幸代 うん、昼過ぎの飛行機で。勇次さん、兄ちゃんの料理、美味しい、美味しいって食べてたね。

修 まあ、当たり前だよ。

幸代 (笑ってる)

修 でも良かったのか、何も言わないで出てきちゃって。

幸代 だって寝てるのに起こすの可哀想でしょ？

修 まあ、そうだな。一緒に来ても、勇次さんには見えないもんな、この朝日。

幸代 ……うん。

修 どこで出逢ったの？勇次さんと。

幸代 美容師って結構疲れるのね。ずっと手を動かしてるでしょ。立ち仕事だし。

修 ああ、そうだな。

幸代 で、友達から腕の良い三療師を紹介してもらったの。

修 ああ、そういうことか。

幸代 初めて治療してもらった時にね、ロン毛だったの。

修 勇次さん？

幸代 うん。で思わず、なんでロン毛なんですかって聞いちゃって。そしたら床屋に行くのに時間かかるって。

修 ああ。

幸代 で、だったら私が切ってあげましようかって話になって、そっからご飯とか行くようになって、いつの間にか。

修 お前から？

幸代 うん。だって、向こう、遠慮してばかりだから。

修 言い方、悪くなるけど、身の程を弁えてるんだろうな。

幸代 そういところとか、なんか、なんかさ。

修 兄ちゃん、最初、どんな男つれてくんのか、眠れなかったよ。

幸代 (笑ってる)

修 母さんも勇次さんのこと、気に入ったようだし。

幸代 うん(間)お母さん、年取ったね。

修 まあ、今年で63歳だからな。

幸代 ……ごめんなさい。

修 なにが。

幸代 私、東京で暮らしてゆくからお母さんのこと……

修 (遮るように)ばか。そんなことよか、な。

幸代 だけども。

修 もういっぺん言っておくけど、派手派手しい結婚式なんかするんじゃないぞ。ささやかで良いからな。ささやかなら形なんかどうだって

良いよ。そのかわり兄ちゃん、心から祝ってやるからさ。な。

幸代 (頷く)

修 お前、いっぺん、あそこのテトラポッドで海に落ちて死にかけたんだぞ。まあ、もっともあの頃は本当に、いつも二人っきりだったからな。母さん、忙しいのわかっているから頼ることもしなかったしな。俺がすぐに助けただけど、冬だったから風邪引いてさ、死ぬなあ、死ぬなあって俺はわめいてさ。あのチビがよ、生意気に結婚だもんな。

幸代 ……

修 そろそろ帰るか。

幸代 兄ちゃん。

修 ん？

幸代 ……色々とお世話に……

修 (遮るように)やめやめ。

幸代 え。

修 そういうのは聞かない、聞かないぞ、俺は。

幸代 兄ちゃん……

遠くから杖のつく音が聞こえてくる。

修 (下の道路を見て) おい。おいって。

幸代 ん？

修 あれ。

幸代 あ。何で？

修 何でって、お前探しに来たんדרו？

幸代 うん。

修 でも凄いな、よく来れるな。まあ、ペンション出て一本道だけどね、それでもな。

幸代 勇次さ〜ん！

勇次 (声のみ) さっちゃん。

幸代 (去る)

修 え、あ、どうしよ……

勇次と幸代が現れる。

幸代 (勇次をベンチに座らせ) よくわかったね、ここって。

勇次 うん、起きたらいないから、気になって戻ってくるの待ってたんだけど、なかなか、戻ってこないから。ここに來てるのかなって。

幸代 私、ここで朝日を見るのが凄く好きで、小さいころ、よく兄ちゃんじ。

勇次 そっか、修さん、おはようございます。

修 (俺はいないってジエスチャー)

幸代 (何で？ってジエスチャー)

勇次 あれ、ひとりて来たの？

修 (ひとりって言えってジエスチャー)

幸代 (何で? ってジエスチャー)
勇次 あれ、さっちゃん?
幸代 え、あ、うん。
勇次 てっきり、修さんと来てるのかと。
修 (俺はいないってジエスチャー)
幸代 (何で? ってジエスチャー)
修 (いいからってジエスチャーをして去る)
幸代 うん、ひとりで来た。
勇次 そっか。はあ。違っただね。
幸代 何が?
勇次 日中の空気と、朝の空気。
幸代 うん、そうですね。風も関係してるかも。
勇次 そっか。風か。瀬戸内海の風か。
幸代 はい。
勇次 気持ちいい。
幸代 ……勇次さん。
勇次 ん?
幸代 結婚式だけど。
勇次 僕ね、ささやかな結婚式が良いな。
幸代 え。
勇次 そんな派手にしなくてもさ、ちゃんと心から祝ってもらえれば、
幸せになれるような気がする。
幸代 気がする。じゃなくて、なるんです、幸せに。
勇次 ……
幸代 勇次さん?
勇次 うん、なろう。見える。
幸代 え。
勇次 僕とさっちゃんが見える。
幸代 え(間)どんな風景ですか?
勇次 海だよ。
幸代 どんな?

勇次 君の生まれ育った海。

幸代 うん。

勇次 君がとっても大好きな海。

幸代 うん。

勇次 海を眺めている君の隣には僕がいて。

幸代 うん。

勇次 僕のぶんまで君が海を見ていてくれるんだ、ずっと。

幸代 (何故だか涙が溢れてくるが勇次に気付かれないようにして泣く)

勇次 (それには気付かず、幸代の手を探して握りしめる)

【了】